

三樹陽介(目白大学)

y.miki@mejiro.ac.jp

1. はじめに(研究の背景と目的)

本発表では、八丈語三根方言における人称代名詞・指示代名詞について、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成(プロジェクトリーダー：木部暢子)」の一環として体系記述の精緻化を目的として行なった 7・80 代の生え抜き話者への臨地調査で得たデータをもとに、先行研究で示されている体系に新しい記述を加え、特に正常複数と近似複数との対立が階層性を伴って存在することを論じる。

八丈語の指示詞・代名詞の体系は、国立国語研究所(1950)、平山輝男(1965)、内藤茂(1979)、大島一郎編(1987)、金田章宏(2001)、などの先行研究によって明らかにされている。しかし、双数の有無や除外の 1 人称複数と包括的 1 人称複数の存在などについては記述がない。

本発表では、新発見の情報を加えた人称・指示代名詞の体系を示した上で、既知の複数接辞-ra に今回見つけた-rara を加え、複数接辞を 2 系列に整理することで八丈語に正常複数と近似複数との対立が存在することを明らかにする。併せて複数接辞の付与には階層性があることを論じる。さらに、双数は存在しないこと、1 人称複数では包括と除外の区別がないこと、の 2 点を明確にし、2 人称では現在一部の用法に変化(単純化)が進んでいること、実質 1 人に対するの複数形使用の可否など、現在進行中の数のカテゴリーの変化についても論じる。なお、表記は原則、金田(2001)に従う。

2. 人称代名詞・指示代名詞の体系

表 1、2 は人称・指示代名詞の体系表である。従来、人称代名詞の複数は-ra の 1 系列のみであったが、近年の話者では新たな複数接辞-rara の使用がみられる。-ra と-rara とは用法が異なることから、本発表ではそれぞれに複数 1 と複数 2 という名称を与え、2 系列にわけて整理した。複数 2 は通常 2 人称以上の場合に使用がみられる。1 人称では積極的には使用されず、使われる機会がかなり限られている。

指示代名詞では人間を指す場合のみ、2 系列の対立が確認できている。指示代名詞が無生物や物を指す場合は複数 2 は使用できない。なお、複数には元々、kora に対する korara や sora に対する sorara のように、複数形の中に-ra と-rara の対立を思わせるものが存在する。同様のことは人称代名詞でも una と unara があるが、どちらも複数 1 にあたるものである。

2-1. 2 人称・3 人称

-rara の使用は 2 人称以上でよくみられ、1 人称と比べ 2 系列の対立が明確である。(1)(2)のように、二人の場合は-ra、二人以外の場合は-rara が用いられている。一見、双数と複数との対立のように見えるが、元々-ra は複数であらわす接辞として以前から存在し、そこに新たに-rara が加わり対立が生まれたものであり、-ra が複数から双数へと変化したとは考えにくい。また、(3)のように、複数 1 の unara は 3 人以上でも使用できることから、-ra は双数ではないことがわかる。

表 1. 人称代名詞の体系

	ハダカ格			ガ格		ヨ格		ニ格		
	単数	複数 1	複数 2	単数	複数	単数	複数	単数	複数	
1 人称	ware	warera	—	waga	wareraga	warei	warero:	wareN	wareraN	
	wai	waira	(wairara)	—	wairaga	—	wairo:	—	wairaN	
	ai	—	—	aga	—	arei	—	areN	—	
2 人称	尊称	ome:	ome:ra	ome:rara	ome:ga	ome:raga	ome:jo	ome:ro:	ome:ni	ome:raN
	同輩前後	omi	omira	omirara	omiraga	omiraga	omjo	omiro:	omiN	omiraN
	同輩以下	omai	omaira	omairara	omaiga	omairaga	omaijo	omairo:	omaini	omairaN
	目下	unu	unura	unurara	uNga	unuraga	unu:	unuro:	unuN	unuraN
		—	una	—	—	unaga	—	uno:	—	unaN
		—	unara	unarara	—	unaraga	—	unaro:	—	unaraN
	喧嘩ことば	nare	narera	narerara	narega	nareraga	narei	narero:	nareN	nareraN
3 人称	同輩前後	ure	urera	urerara	urega	ureraga	urei	urero:	ureN	ureraN
	同輩前後	—	ura	—	—	uraga	—	uro:	—	uraN
	同輩以下	—	urara	urarara	—	uraraga	—	uraro:	—	uraraN
		ui	uira	(uirara)	uiga	uiraga	—	uiro:	—	uiraN
		uicu	uicura	—	uicuga	uicuraga	uicu	uicuro:	uicuN	uicuraN
疑問	dare	darera	—	daga	dareraga	darei	darero:	dareN	dareraN	
	dai	daira	dairara	—	dairaga	—	dairo:	—	nairaN	

表 2. 指示代名詞の体系

	ハダカ格			ガ格		ヨ格		ニ格	
	単数	複数 1	複数 2	単数	複数	単数	複数	単数	複数
コ系	kore	korera	—	korega	koreraga	korei	korero:	koreN	koreraN
	—	kora	—	—	koraga	—	koro:	—	koraN
	—	korara	korarara	—	koraraga	—	koraro:	—	koraraN
	koi	koira	—	koiga	koiraga	—	koiro:	—	koiraN
	koicu	koicura	—	koicuraga	koicuraga	koicu	koicuro:	koicuN	koucuraN
ソ系	sore	sorera	—	sorega	soreraga	sorei	sorero:	soreN	soreraN
	—	sora	—	—	soraga	—	soro:	—	soraN
	—	sorara	sorarara	—	soraraga	—	soraro:	—	soraraN
	soi	soira	—	soiga	soiraga	—	soiro:	—	soiraN
	soicu	soicura	—	soicuga	soicuraga	soicu	soicuro:	soicuN	soucuraN
ウ系	ure	urera	—	urega	ureraga	urei	urero:	ureN	ureraN
	—	ura	—	—	uraga	—	uro:	—	uraN
	—	urara	urarara	—	uraraga	—	uraro:	—	uraraN
	ui	uira	—	uiga	uiraga	—	uiro:	—	uiraN
	uicu	uicura	—	uicuga	uicuraga	uicu:	uicuro:	uicuN	uicuraN
ド系	dore	dorera	—	dorega	doreraga	dorei	dorero:	doreN	doreraN
	—	dora	—	—	doraga	—	doro:	—	doraN
	—	dorara	(dorarara)	—	doraraga	—	doraro:	—	doraraN
	doi	doira	—	doiga	doiraga	—	doiro:	—	doiraN
	doicu	doicura	—	doicufa	doicuraga	doicu:	doicuro:	doicuN	doicuraN

- (1) uno kasjowa unara φutariga kamo:do:ka. (複数 1)
あの菓子はお前たち 2 人が食べたのか。
- (2) uno kasjowa unararaga kamo:do:ka. (複数 2)
あの菓子はお前たちが食べたのか。
- (3) uno kasjowa unara saNniNga kamo:do:ka. (複数 1・unara+3 人)
あの菓子はお前たち 3 人が食べたのか

3 人称における 2 系列は 2 人称に準ずる。

- (4) uno kasjowa urara φutariga kamo:do:ka. (複数 1)
あの菓子はあいつら 2 人が食べたのか。
- (5) uno kasjowa urararaga kamo:do:ka. (複数 2)
あの菓子はあいつらが食べたのか。

2-2. 2 系列の対立

この対立は双数と複数の対立ではなく、正常複数と近似複数との対立である。複数 2 の unarara は、(6)のような場合に使用されるが、話者の内省では、会話の場にいる聞き手に加え、会話の場にはいない人を含む場合にのみ用いられる。会話の場にはいない人はその場にいる人と同種とはみなされず、近似複数の対象となる。従って、(7)のように聞き手ともう一人がその場にいることが前提とされるような場合は使用されない(2 人目がその場にはいない場合は使用できる)。

- (6) ○ uno kasjowa unararaga kamo:do:ka. (複数 2)
あの菓子はお前たちが食べたのか。
- (7) △ uno kasjowa unarara φutariga kamo:do:ka. (複数 2)
あの菓子はお前たち 2 人が食べたのか。

同様のことは八丈語の別の方言でもみられる。以下の(8)(9)は末吉方言の例である。(8)の omaeNcje:ra は、会話の場にいる聞き手に加え、会話の場にはいない人を含む場合に用いられる。omaeNcje:の接辞 -Ncje:は三根方言の -ra にあたるものであるが、-rara にあたるものとして -Ncje:ra という接辞がみられる。このことから、複数 2 は八丈語全体に一斉に新しくできた形と考えられ、従来あった -ra、あるいは -Ncje:という複数接辞にさらに -ra が接続して新しく系列 2 の -rara、あるいは -Ncje:ra が生まれたものと考えられる。

- (8) uno kasjowa omaeNcje: φutariga kaNdanoka. (複数 1)
あの菓子はお前たち 2 人が食べたのか。
- (9) uno kasjowa omaeNcje:raga kaNdanoka. (複数 2)
あの菓子はお前たちが食べたのか。

2-3. 1 人称

1 人称は wa 系と a 系の 2 系列からなり、wa 系の ware は単数・複数に関係なく助詞が後続するが、wai は複数のみ、a 系の ai は単数のみにしか助詞が接続せず、相補分布をなしている。これら 1 人称代名詞は語による丁寧さの違いはない。先行研究(金田 2001 など)では are という語形もみられるが、本調

査の話者は使用しない。また、古くは女性に **warawa** の使用があったが、現在では使用されない。

1 人称複数では、原則複数 1 の **waira** が用いられ、複数 2 の **wairara** は使用されにくい。会話の場にはいない人を含む場合でも **waira** が使われることがあり、また、**wairara** は話者の内省では非常に大勢の人を含めて言う場合には使えないこともないが、積極的には使用されない。1 人称複数では 2 系列は未分化、あるいは十分に分化していないといえる。

- (10) ○ uno kasjowa wairaga kamijarogoN. (複数 1)あの菓子は私たちが食べましょう。
- (11) △ uno kasjowa wairaraga kamijarogoN. (複数 2)あの菓子は私たちが食べましょう。
- (12) × uno kasjowa wairara futaride kamijarogoN.(複数 2)あの菓子は私たち 2 人で食べましょう。

2-4. 指示代名詞

指示代名詞の場合、近似複数との対立はより明確で、(13)(14)のように同種のもが複数の場合と、異なるものが含まれている場合とで、複数 1・2 の使い分けがみられる。ただし、ハダカ格の場合やガ格が後接する場合はこうした使い分けが現れやすいが、ヨ格やニ格が後接した場合、複数 2 は非常に現れにくく、複数 1、あるいは単数が用いられることが多い。

- (13) koreraga hosikja. (複数 1) これら(複数のサツマイモ)が欲しい。
- (14) koreraraga hosikja. (複数 2) これら(サツマイモを含む多くの野菜)が欲しい。

3. 複数接辞の階層性

表 3 は複数接辞の階層性をまとめたものである。普通名詞(人間・動物)と疑問代名詞は複数 1・複数 2 の双方を後続させることができるが(例文 15~20)、呼称詞、指示詞(無生物)、普通名詞(無生物)は複数 2 を後続させることができない。呼称詞は複数 1 のみ後続させることができるが(例文 21・21)、普通名詞(無生物)はどちらも単数を使用する(例文 25・26)。普通名詞(無生物)が複数あることを示す場合、(26)のように **siQkariaro** など、別の表現を用いる。また、指示詞(無生物)は、本来三根方言では複数形があるが、本調査の話者は後続する助詞によっては複数形を使用せず、単数を用いている(例文 23~26)。後続する助詞による単・複数の使い分けについては今後詳細な調査・検討が必要である。

表 3. 複数接辞の階層性

	複数 1	複数 2
疑問詞	○	○
人称詞 (1 人称)	○	×
人称詞 (2 人称)	○	○
人称詞 (3 人称)	○	○
普通名詞(人間)	○	○
普通名詞(動物)	○	○
普通名詞(無生物)	×	×
呼称詞	○	×
指示詞 (人間)	○	○
指示詞 (無生物)	△	△

- (15) uno kasjowa daira φutari ga kamo:do:ka. (疑問代名詞・複数 1)
あの菓子はだれら二人が食べたのか。
- (16) uno kasjowa dairaraga kamo:do:ka. (疑問代名詞・複数 2)
あの菓子はだれらが食べたのか。
- (17) uno kasjowa uno otokora φutariga kamo:do:ka. (普通名詞(人間)・複数 1)
あの菓子はあの男ら 2 人が食べたのか。
- (18) uno kasjowa uno otokoraraga kamo:do:ka. (普通名詞(人間)・複数 2)
あの菓子はあの男らが食べたのか。

- (19) uno kasjowa inumerā nihikiga kamo:do:ka. (普通名詞(犬)・複数 1)
あの菓子は犬 2 匹が食べたのか。
- (20) uno kasjowa inumeraraga kamo:do:ka. (普通名詞(犬)・複数 2)
あの菓子は犬たちが食べたのか。
- (21) uno kasjowa taro:ra φutaride kamo:do:ka. (呼称詞・複数 1)
あの菓子は太郎ら 2 人が食べたのか。
- (22) uno kasjowa taro:raga kamo:do:ka. (呼称詞・複数 1) ×taro:rara
あの菓子は太郎らが食べたのか。
- (23) urei φutacu: kamitakja. (指示詞(無生物)・複数 1) ×urero:
あれ(サツマイモ)2 つ食べたい。
- (24) urei kamitakja. (指示詞(無生物)・複数 1) ×urararo:
あれ(サツマイモ)を食べたい。
- (25) uno kaNmou φutacu: kamitakja. (普通名詞(無生物)・複数 1) ×kaNmoro:
あのサツマイモを 2 つ食べたい。
- (26) ukuN siQkariaro kaNmou kamitakja. (普通名詞(無生物)・複数 2) ×kaNmoraro:
あそこにたくさんあるサツマイモを食べたい。

4. 除外的 1 人称複数と包括的 1 人称複数

除外的 1 人称複数と包括的 1 人称複数については、(25)～(28)のように、区別がない。

- (27) uno kasjowa wairaga kamijarogoN. (包括)
あの菓子は私たちが食べましょう。
- (28) uno kasjowa waira φutaride kamogoN. (包括)
あの菓子は私たち二人で食べましょう。
- (29) uno kasjowa wairaga kamodo:te ome:niwa keNnaka. (除外)
あの菓子は私たちが食べるので、あなたにはあげません。
- (30) uno kasjowa waira φutaride kamo:do:te, ome:niwa keNnaka. (除外)
あの菓子は私たち二人で食べるので、あなたにはあげません。

5. 実質一人に対して複数形が使用可能か

1 人称の場合、実質 1 人に対しての複数形使用は可能だが、場面は限定される。例えば自分が若輩で親戚の集まりなど自分のような若輩がたくさんいる場合、それを代表していうことはできる。ただし、話者の内省では warera は問題ないが、waira は難しく、前者の方がより謙譲の気持ちが強い。

- (31) ○ wareraga(wareraNse:ga) goNdo:mede jokuozjaro:kano:.
わたしたちのような者でよいのでしょうか。
- (32) ▲ wairaga(wairaNse:ga) goNdo:mede jokuozjaro:kano:.
わたしたちのような者でよいのでしょうか。

2 人称以上の場合、実質 1 人に対しての複数形使用はできない。

- (33) × ome:raga goNdo:mede jokuozjaro:kano:.
あなたたちのような者でよいのでしょうか。
- ×ome:raga、omaeraga、aicuraga、
taro:raga、uno otokoraga

疑問詞の場合、金田(2001)では実質 1 人に対しての複数形使用は可能とされるが、数の対立があるわけではなく、単数形であっても複数の意味で使用できる。ただし、人を表す際に限られ(例文 34)、限定的なものといえる。また、本調査の話者では複数には使用できない(例文 35)。

(34) dairaka: mure:ba i:ka.(金田 2001) 誰らからもらえばいいか。

(35) daika sikaijo sitekeruto tasukarodaido:ga. 誰か司会をしてくれると助かるのだが。

6. 2 人称の用法の単純化(omi の衰退)

2 人称は丁寧さの階層が細かく分かれており、ome: は目上に、omi は同等とその前後に、omai は目下に用いる。このほか unu や nare という形もあるが喧嘩言葉のようなもので通常は使用しない。しかし omi を中心に単純化が起こっていて、現在でも個人によって使用頻度に差があり丁寧さの程度にもばらつきがみられる。本調査の話者はほとんど omi を使用せず呼称詞を使用するが、話者の内省によると、omi を使うことで文に皮肉っぽいニュアンスが加えられる。

(36) eikocjaNno tameN jaQtazja. エイコちゃんのためにやった。(人物名)

(37) omino tameN jaQtazja. あなたのためにやった。(omi)

7. まとめ

本発表では、既知の複数接辞-ra に、新たに発見した-rara を加え、これらを 2 系列に整理することで八丈語に正常複数と近似複数との対立が存在することを明らかにした。また、八丈語の三根方言と末吉方言との比較から、-rara(末吉では Ncje:ra)は既存の-ra(末吉では Ncje:)に-ra が接続して発生したものであることを示し、現在、八丈語全体に広まっているものであることを示した。

複数接辞の現れ方については、人称や指し示す対象により階層性があることを論じ、また、後続する助詞によってもその現れ方に差があることを示した。後者についてはまだ検討が必要であり、複数の話者へのエリシテーションや談話分析を行なう予定である。本発表では再帰代名詞的用法については扱えなかったが、これについても今後の検討課題とする。

謝辞: 本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成(プロジェクトリーダー: 木部暢子)」の研究成果を報告したものである。

また、本研究は JSPS 科研費(課題番号 15J11988、15K16766)及び、三菱財団第 46 回人文科学研究助成の助成を受けている。

参考文献

飯豊毅一(1959)「八丈島方言の語法」『国立国語研究所論集 1 ことばの研究』

大島一郎編(1987)『八丈島方言における言語変化 -共通語化の側面を中心として』、東京都立大学人文学部 国語学研究

岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的研究』、ひつじ書房

金田章宏(2001)『八丈方言動詞の基礎研究』

亀井孝ほか(1995)『言語学大辞典(第 6 巻) 術語編』、三省堂

国立国語研究所(1950)『八丈島の言語調査』

下地理則(2013)「琉球諸語の代名詞双数形」『琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究』17-32、京都大学大学院文学研究科言語学研究室

堤良一(2012)『現代日本語指示詞の総合的研究』、ココ出版

徳永晶子(2013)「沖永良部島国頭方言の人称代名詞」『琉球の方言』38、法政大学沖縄文化研究所。

内藤茂(1979)『八丈島の方言』、私家版

平山輝男(1965)『伊豆諸島方言の研究』、明治書院